引用の接続形式と発話者の態度との関連性を探る

――『って』と『と』の引用形式を中心に

所属　S12（漢字表記）　学籍番号

一、はじめに

講義や談話をするとき、自分の意思を相手にはっきり伝えるため、あるいは相手を持ち資料の特定なところを注目させるため、発話者はよく引用、参照の表現方式を利用する。引用の基本的な形式の特徴は、引用節と述語動詞が結びついて全体として一つの文を構成していること（砂用 1989）。構造として、《引用内容+引用形式+述部動詞》（渡辺 2010）三つの構成部分を備えているのは常だが、実際の場合によって、さまざまな形式的バリエーションが存在する。それに、発話者の意図と引用内容についての態度が形容内容の接続を決定すると考えられる。

この論文の目的は、大学院のゼミの談話における参照、言及表現の中から、引用の接続形式と発話者の態度との関連性を明らかにすることだ。

二、先行研究と本研究の位置づけ

大学院のゼミの談話における参照、言及表現について扱った研究には浜辺文生『講義の談話の引用と参照』や『現今の引用研究に関する所見一斑――山口治彦説のこと』（藤田保幸（2011））などがある。

浜辺(2010)は講義という場面での、講義者がどのような表現を用いて教材、教具に受講者を注目させ、どのようにそれらの内容を伝えているのかについて分析した。結論として、引用内容によって、発話者が使う引用の接続形式が違っていると述べた。

そして藤田（2011）は『って』と『と』という二種な引用形式が実際の談話の中に出る場合をそれぞれ記録した。引用形式の選択と発話者の立場と関連性があると指摘した。

しかし、先行研究は記録、あるいは仮説を提出した段階に止まっている場合が多く、大学院のゼミ談話を対象に、引用の接続形式と発話者の態度には関連性がある、という観点から扱った研究はまだ十分にされていないと思われる。そこで、わたしはその関連性について、分析を行うことにしたい。

三、研究の資料と分析の方法

研究の資料は、2015 年 9 月に、神奈川県の三浦半島のホテルで行われた都内の大学院の某ゼミナールの 40 分程度の談話の二つを文字化したものである。

一つは、『(研究発表タイトル)』というテーマをつけ、絵本が外国語の学習の中どれほど役に立てるのかを討論した談話である。発表者を含め、参加者は 8 名で、それぞれ発表者が配ったレジュメを参照しながら、コメントした。、

もうひとつは、『(研究発表タイトル)』というテーマで、発表者を含め 5 人の談話だ。前の資料と同じ、談話の参加者はレジュメを参照していながら談話を続けていた。

そして、その文字化データから、引用の接続形式と発話者の態度には関連性があるの観点からデータを抽出し、分析を行った。

四、分析の結果

データからみれば、同じ発話者であって、しかも同じ内容を引用するとしても、その引用内容の後ろに接続する引用助詞と述部動詞は場合によって必ずしも同じではない。

データの中から引用と参照表現のあるところを抽出すると、引用の接続形式は大体以下のように分類できる。

１、引用内容＋って＋述部動詞＋けど/けれども/が

２、引用内容＋って＋述部動詞＋では（じゃ）ないか/です（だ）よね

３、引用内容＋って

４、引用内容＋と＋述部動詞＋けど/けれども/が

５、引用内容＋と＋述部動詞＋では（じゃ）ないか/です（だ）よね

この五種類が談話の中それぞれ出た頻度から見ると、そして談話全体の文脈によれば、発話者が引用内容を賛成する場合、または引用内容の正確さを強調しようとするとき、『と』の使い頻度はより高いと推測できる。

その代わり、引用内容について疑問がある、全般的に賛成できず、もしくは反対し、軽視するとき、『って』の使い頻度がより高い。